



TITLE:

型について (特別號)

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

CITATION:

恒藤, 恭. 型について (特別號). 經濟論叢 1928, 26(1): 99-119

ISSUE DATE:

1928-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128782>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號 一 第

卷六十二第

行發日一月一年三和昭

特 別 號

法人に關する重複課税の問題 . . . 法學博士 神戸 正雄

ハイデッガーの關心論 . . . 文學博士 米田庄太郎

動物界の道德 . . . 理學士 川村多實二

長崎貿易に於ける銅及銀の支那輸出に就いて . . . 文學博士 矢野 仁一

型について . . . 法學士 恒藤 恭

アダム「富國民論」の研究對象并に方法の基本的考察 . . . 法學士 石川 興二

奧羽諸藩における赤子養育仕法 . . . 經濟學博士 本庄榮治郎

自作農地の創設及維持 . . . 法學博士 河田 嗣郎

專賣類似の仕法に基く百姓一揆 . . . 經濟學士 黒正 巖

型について

恒 藤 恭

一 型による認識

合理性と非合理性との對立は人間の生活のあらゆる方面を通じて觀取される。合理性の要素が人間の活動を如何ほど力強く支配する處においても、その裏面において非合理性の要素がはたらいて居ないことは無く、反對に、非合理性の要素が極めて優勢に見える場合にあつても、これに伴うて合理性の要素が人間の活動を何等かの程度において制約するのを通常とする。人間の生活の諸種の方面を考察の對象とする所の文化科學は、人間の活動に關する斯やうな根本的事實を十分に考慮しなければならぬ。科學はそれ自身人間の活動の一方を成すものであり、従つてやはり右の如き對立を己れの裡に含むことを免れないが、しかも科學の本領が知識の體系の建設にある以上、特に合理性の見地を重んじ、非合理的成分を能ふかぎり自己の内包から除却することに努力することを要する次第である。しかしながら、合理的要素と非合理的要素との複雑なる契合

によつて成り立つ所の人間の生活の諸相を認識せむとする文化科學は、いかにして斯かる科學の本領を發揮し得るであらうか。

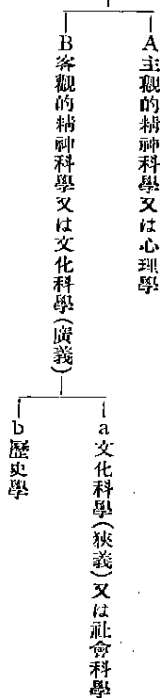
一般に合理性と普遍性との間には極めて緊密なる關係を存する。人間の生活の諸方面において合理性の要素が觀取されるといふ時、これと共に何らかの意味において普遍性の要素に當面し得ることが暗示されてゐる。而して科學にとつては合理性の見點は概念構成に關する普遍性の見點と互ひに照應する。元來、非合理的なるものとは體系の中に系入される事を拒むもの、體系の構成分子たるに適合せざるもの、謂ひである。これに反して、合理的なるものは互ひに他の合理的なるものと關聯して體系を構成する必然的傾向を具有するものであり、體系の內面的秩序によく應化するものである。しかるに、如何なる内容と構造とをもつ體系と雖も、普遍性の見點を内含し、何らか普遍的なるものを形成原理とするのでなければ成立し能ふものではない。之を認識の體系について言へば、ある體系の成分たり得る概念は、いかに個性的特殊の内容を具有するものであつても、しかもその體系の全體との關聯において普遍的要素を具有するものでなければならぬ。文化科學の場合についても異なる所はない。普遍化的文化科學、すなはち社會科學について、概念構成に關する普遍性の見點が重要な意義を有することは言ふまでもない。個性化的文化科學、すなはち歴史科學については、その特色の一つが事象の關聯の個性的様相を把捉する點

にあると考へられるが、歴史的發展の因子たる個々の人物、集團、事件等の特殊的様相その者を記述するだけであつては、如何にして歴史(科學)が科學として成立し能ふかを解すべくもない。科學としての歴史は必ずや體系的構造を具備することを要する。言ひかへると、歴史的觀念の各者は著しく個性的成分を内包するものであるとしても、互ひに相關聯して事象の關聯の全體としての體系を構成する爲に適當なる普遍性をも含有するのでなければならぬ(註)。

(註) 經驗科學を分類して自然科學と非自然科學との二種類となす場合において、後の種類の經驗科學をいかに名づくべきかは、必ずしも單なる名稱の問題に止まるものではなく、相當重要な問題であると思ふ。この考察においては――暫定的な意味において――はあるが――便宜上、次のやうな仕方て經驗科學を分類し、かつ自然科學に非ざる經驗科學の諸部門につき次に示す如き名稱を用ひたいと思ふ。

I、自然科學

II、精神科學(廣義)



かくて社會科學も歴史科學も共に普遍性の見點を重んじなければならぬが、合理性と非合理性との錯綜において成り立つ人間の生活の諸方向につき、吾々はいかにしてこの對立を克服し能ふか、對象の特性を無視し又は損傷することなく、その真相に接することを期しつゝも、いかに

して斯かる作業と體系建設の見地との二者をして調和せしめ得るか、緊要の問題たらざるを得ぬであらう。『型』による認識方法¹⁾又は『型』を求める認識方法²⁾は、斯かる任務の解決に役立つものであり、『型』の思想は社會科學にとつても歴史科學にとつても重要な意義を有すると思ふ。

科學的方法の發達の歴史及び科學的方法に關する思想の發達の歴史の上から見れば、『型』による認識又は型への認識は先づ自然科學の方面において自覺的に行はれ、これに關する見解もこの方面に先づ擡頭したと考へられる。これに比すれば、精神科學の方面において型の見點を把持する認識の重要性が一般に認められるに至つたのは、比較的近時の事柄に屬すると思ふ。かやうな歴史的事情から見れば、型の見點を把持する認識方法は自然科學の方面において特に重要性をもつものではあるまいかと云ふ推測が下され易いかも知れぬが、私自身は反つてそれが精神科學の方面において一層重要な意義をもつと思惟する。元より斯く言ふ場合には、すでに型の本質又は型による認識の性質³⁾に關する一定の見解に立脚するものである。何となれば、型の本質又は型による認識の性質を如何やうに解するかにより、型による認識方法は自然科學にとつて特に重要な意義をもつとも、精神科學にとつても自然科學の場合に劣らぬ程度又はそれにまさる程度において重要な意義をもつとも思惟され能ふからである。いづれにせよ、型による認識方法が精神科學にとつても重要な意義を有することは、後に例示する如く現今、心理學及び文化科學の諸

- 1) 「型による認識方法」とは型的概念又は型の見點を利用することにより一定の認識目的を達成せむとする認識方法をさす。
- 2) 「型を求める認識方法」、「型への認識方法」又は「型を立てる認識方法」とは、一定の型的概念又は一定の型の見點を獲得すること自身を以て目的とする認識方法をさす。

部門においてそれが著しい程度において行はれつゝある事實に徴して明白であると思ふ。

型による認識又は型を立てる認識が學問的方法としてその効果を正當に收め得るためには、根本において型の論理的性質に關する十分なる理會の獲得されてゐることを要する。勿論、個々の研究においては、謂はゞ直覺的に型の思想を把握し、之を利用する事により大なる成績を擧げることが可能たるであらうが、各種の科學における體系的見地からして型による認識又は型を立てる認識を役立てるためには、十分なる自覺において型の思想の利用されることが必要たるであらう。かやうに考へて來ると、一般に型はいかなる性質をもつか、型による認識方法又は型への認識方法は學問上いかなる意義をもつかといふ問題を明瞭なる自覺を以て提起し、適當なる解決の方針を求めつゝ之を考察することが望ましく思はれるのである。また斯かる問題を特に精神科學の立場、就中文化科學の立場との關聯において考察することは、後者の學問的性質及び職分を正しく理會する上にも役立つものである、言ひかへると、精神科學の方法論の考察の上には、右の如き問題の考察を閑却し得ないと思ふ。

二 精神科學の諸部門における型的認識方法

學問と常識との二者に共通なる概念と然らざる概念とがある。前の種類の概念についても、先

3) 以下において特に「型への認識」と對立せしめることなく「型による認識」といふ場合には、これらの二者を包括して指稱する事とする。

づ常識において定立され、次に學問上に利用されるものと、先づ學問上に定立され、然る後に常識に移し入れられるものがある。而して先づ常識において定立され、次に學問上に採用された概念が、學問的見地から精練された上、斯かる形態において再び常識によつて利用される場合がある。『型』の概念も斯かる運命を経過せる概念の一つである。

型の概念は十八世紀の終り頃から殆んど時を同じくして經驗科學の諸部門に現はれはじめたが、獨逸においては哲學者として且つ生物學者としてのゲーテが形態學的考察の上に型の見點を役立てたのがその魁けであり、殆んど時代を同じくして佛蘭西では比較解剖學及び古生物學の創始者たるキュビエ¹⁾が型による考察方法の學問的價值を高調した。²⁾これらの人々が型の概念及び用語を採擇したのは、恐らく常識における型の概念及び用語を活用したのであらうと推想される。その後自然科學及び精神科學の諸部門において型の概念及びこれによる考察方法が利用されるに至つたのは、根本において——多くの場合には無自覺的に——或る種の形而上學的思想の影響に因る所があると思はれるが、社會における型の通俗的概念からの暗示と刺戟とに負ふ所が少くないと思ふ。今日においても、型の論理的性質についての反省を試みることなくして型の概念を學問的考察の上に利用しつゝある人々の中には、むしろ型の常識的概念を不知不識肯定し是認してゐるかの如き場合が希れでない。元より常識は必ずしも價值の乏しきものと言ひ得られるわけでは

1) Goethe, Die Metamorphose der Pflanzen, 1790: Zur Metamorphose des Tierreichs, 1790.

2) cf. Schaxel, Grundzüge der Theorienbildung in der Biologie, 1922, S. 36 ff.

ないが、學問的見地においては、よゝ常識的思想が正しき知見を含んでゐるとしても、その正しき所以を明かにした上でなければ之を承認してはならぬし、かつ又その含蓄する所の價值あるものを一層發展せしめることを要する。

社會において現に常識的に用ひられてゐる型の概念には、それが學問上に轉用されるに至つた以前から引續き存在するものと、學問上における型の概念の轉用の影響を被つたものの二種類がある。今姑く斯かる區別を顧慮することなく、常識的に行はれてゐる型の概念につき若干の例を舉げると、鑄型、字型、塑型、紙型等をはじめとして、種々の器物、機械の型、染織の型、建築物の型¹⁾の如き有體物の型の概念を先づ指示することが出来る。その他、人物の型、流行の型、競技の型、儀禮の型、舞蹈の型、演劇の型、文章の型、種々の藝術上の流派の型といふ如き複雑なる性質をもつ型の概念が數多く行はれてゐる。原型、模型、類型、典型といふやうな、種概念的性質をもつ型の概念も通俗的に行はれて居り、更に、『型にはまる』とか、『型に囚はれる』とか、『型を守る』とか、『型をやぶる』とか、『型の如くに』といふやうな、類概念的性質をもつ型の概念も常識的に用ひられてゐる。

翻つて眼を經驗科學の領域に轉すれば、先づ化學、結晶學、植物學、動物學、氣象學、地理學、生理學、解剖學などの自然科學の諸部門において型の概念及びこれにもとづく認識方法が行

- 3) この種の型の概念が歴史的に先づ形成されたものであり且つ從來普通に行はれ來つたものであると思ふ。従ていはゆる示型者が従型者制作の爲に媒介的機械的機能をいとなむのがこの種の型の特色である。
- 4) この種の概念は前の種類の型の概念よりも遅れて現れたものであると思ふ。

はれて居る。とりわけ精神科學と交渉する所の深い生物學の諸分科において特に型による認識が重要視されてゐることに注目せざるを得ぬ。

次に精神科學の方面においては、先づ心理學は早くから型による認識を有効に使用してゐる。この領域においては性格の型 (Charaktertypen) は東洋においても西洋においても心理學的常識の風に認知してゐた所であり、例へば古代希臘においてテオフラストスはすでに詳細なる性格の型の分類を企てた。⁵⁾ 科學としての心理學が發達して以來、例へば思惟作用に關する類型的表象 (typische Vorstellung)、表象の型 (視覺型、聽覺型、運動型等)、記憶の型 (事物表象型、言語表象型等)、知能の型 (天才型、能才型等) などは最も普通にみとめられてゐる型の概念であるが、個性心理學、性格學、變態心理學、民族心理學、文化心理學などの諸部門において、型による認識方法が種々の仕方、種々の見地において利用されつゝあり、將來一層重要視されむとする傾向を存するかに見受けられる。

心理學と共に諸々の文化科學に對し基礎的學問たる地位に立つ社會學においても、風に型による認識方法が認められて居り、例へばスペンサーは社會組織を標準として "the militant type" 及び "the industrial type" の概念を定立した。⁶⁾ 社會學方法論に關するコントの學說の中にも型の思想が支配してゐる形跡を觀取し得るであらう。いはゆる形式社會學の先驅者たるジンメルにお

5) cf. Roback, The Psychology of Character, 1927, p. 9f.

6) Spencer, The Principles of Sociology, 1883, vol. II. p. 568.

ても型の見點が相當重んぜられてゐるが、型による認識方法を鮮かな手際を以て試みたものとしてテンニースの好著 „Gemeinschaft und Gesellschaft“ を舉示し得るであらう。これと並んでマックス・ウェーバーの „Idealtypus“ に關する學説は文化科學又は社會科學の方面における型の概念の方法的意義に新しき生命を注ぎ入れたものとも言ふべく、わが國においても特に社會學の領域においては型的認識方法の意義が最近著しく注目されるに至つた。たゞ一二の例をあげると、高田保馬氏は「社會關係の研究」の中で或は「定型としての共同社會」につき、或は「理想型」と「本質的定型」との對照につき精緻なる考察を加へて居られ、作田莊一氏は本論叢所載の「純粹國家」の論において定型的考察方法を用ひることにより獨創に富める國家觀を展開された。

マックス・ウェーバーの „Idealtypus“ に關する思想は經濟學の領域における彼の研究の上にも十分に役立てられて居り、この方面における彼自身の業績及び學界にあたへた影響は多大なものがあるが、型による認識が經濟學の領域において用ひられたのは決して彼を以て嚆矢とするわけではなく、むしろ經濟學はその成立の當初より型的認識方法を利用し來つたとも視ることを得るであらう。この點については、型による認識方法の使用その者と、これに關する方法的自覺的見解とを區別すべきであり、一般に精神科學の諸領域において前者は常に後者に先存せる事實を特記しなければならぬ。斯かる諒解を以て經濟學の領域を通觀するならば、ひとり古典學派、奧太

- 7) 小松堅太郎氏、社會學研究に於ける圖式的方法と純型的方法(社會學雜誌第三十四號) 森照
8) 村松恒一郎氏、Max Weber の Ideal Typus 概念につきて(商學研究第三卷第三號)、小松堅太郎氏、理念型概念に就て(社會學徒第一卷)參照
9) 同氏著、社會關係の研究、第五章及第六章參照

利學派、數理學派などの經濟學說のみならず、マルクス學派、歴史學派などの經濟學說においても——それ／＼別個の見地においてゝはあるけれど——ひとしく型による認識方法の役立てられてゐることに當面する¹¹⁾。而して型的認識に關する方法的見解の發展もひとりマックス・ウエーバーのみの功績に歸せらるべきわけのものではない。

古代希臘においてプラトーン及びアリストテレスが國家の型又は政體の型に關する思想を示して以來、中世より近代に至るまで國家學又は政治學の領域においても型的認識方法が重んぜられて居る。この方面においてはイェリネックの方法論の見解がウェーバーのそれに幾らか平行した地位に立つ。型の實用的意義は法律生活において特に顯著なるものがあるが、型的認識の法律學における方法的意義もこれと照應する所である。この方面では犯罪心理學とか刑事人類學とかにおける型的考察方法に刺戟されて特に刑法學の方面において型的現象が注目され始めたが、しかし法律現象に關する型的認識の及ぶ範圍はかやうに局限されたものではない。

社會現象もしくは文化現象の大量的考察を行ふことを任務とする統計學の領域においては、ケトレーが人類の進歩の型(*le type du développement de l'humanité*)¹²⁾として“l'homme moyen”の概念を立て、以來、その學問的性質上特に型的認識方法が重視され來つてゐる。その他、早くより型の見點が方法的に重きを成してゐる文化科學の部門として言語學、教育學、文化地理學、(文化

10) 本多謙三氏、歴史的社會的學問特に經濟學の方法論に就て(思想第七十二號) 參照

11) かつ獨り理論經濟學の領域のみならず、經濟史學及び經濟政策學の領域においても型的認識がさかんに行はれ來つてゐる。

12) Quetelet, Sur l'homme et le développement de ses facultés, 1835, T.

的)人類學などを舉示し得るであらう。

右に挙げたやうな社會科學の諸部門と並行して歴史學の諸部門においても型による認識方法及び型への認識方法が重要な意義をもつことは言ふ迄もない。十八世紀の中葉に端を發し、十九世紀の後半にラムプレヒトなどを中心として展開された政治史的方法と文化史的方法との論争の如きも、型的認識方法の見地からして一層よくその旨趣を理會され能ふであらう。この方面においてはウイルヘルム・フォン・フムボルトやデイルタイなどの歴史哲學的思想の及ぼした影響を考ふべく、そして後者に内含されてゐる型的方法に關する思想に注目することを要するであらう。

普通の意味における歴史學と、精神科學の歴史を對象とする學史(學)とは、方法的性質において著しく異なるものではあるが、この方面においては型による認識はとりわけ重要な方法的意義をもつ。更に、普通の意味における學史とは同一視さるべきでないけれど、形而上學の歴史的考察について、デイルタイが *Naturalismus, Idealismus der Freiheit, objektiver Idealismus* の二つの型を立て、これにより獨自の世界觀の型の學(Typenlehre der Weltanschauungen)を建設せむと企てゝゐるのは、¹³⁾深く吾々の興味を惹く所である。おなじ流れを汲むヤスパーズなどの哲學史的研究にも型の見點が鮮明に浮び出てゐるのを見る。

右に概観したやうに、精神科學の諸方面に亘つて型による認識が一般的に行はれてゐるのであ

II, p. 274.

13) Dilthey, *Das Wesen der Philosophie* (G. S. V.)

14) Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, 3. A., 1925

るが、それらの場合を通じて常に同一の方法的意義を有する型の概念が把持されてゐるわけではなく、種々の見地又は方針を以て型の概念が定立され利用されてゐる。これを我國の學界について見るも、類型、定型、純型、典型、範型、理想型、理念型、平均型などの種々の用語が行はれて居り、これに伴うて型の概念の意義も多様に解せられて居る有様である。そして或は異なる人が同一の用語の下に異なる型の概念を考へて居ることもあれば、或は異なる人が異なる用語を用しつゝもその念頭に置く型の概念は同一のものたる事もある。更には同じ人が同一の型の概念に對し異なる用語を併用し、又は異なる型の概念に對し同一の用語を使用してゐる場合もあるし、かつこの場合に型に關する統一的概念をもたぬかに見受けられる場合もある。元來、型の概念その者が謂はゞ弾力性を有し、動的機能に富むものであると同時に、恰もその爲に捕捉し難き内容、紛らはしき内容を有するものであり、従つて右に指摘したやうな事態を生じがちなのであらう。しかしながら、型による認識が精神科學の諸部門において重要な意義を有するものであるとすれば、吾々は型及び型的認識に關して統一的、綜合的見解を獲得することを期せねばならぬ。すなはち、種々の型の概念は果して統一的思想によつて理會され能ふか否か、若し統一的に理會され能ふとすれば、それらの概念は如何やうに秩序立てられるべきであるかを問題とせざるを得ない。そして吾々は斯やうに型の概念を吟味することにより其本質を把握し、以て型による

認識方法の任務及び性質を明かにすることに努めなければならぬ。元より科學の分野の異なるにつれて型的認識方法の任務及び性質も常に一樣たり能はぬけれど、¹⁵⁾しかもそれが精神科學一般にとつて有效なる方法であるとするれば、個々の部門における適用の特殊性を顧慮しながらも、それらの部門を通觀する綜合的立場からこの問題を取扱ふことが必要たるであらう。

なほ以上に試みた概觀においては、主として精神科學の諸部門において型による認識方法の重要な意義をみとめられつゝある事實に着眼したのであるが、型による認識方法はひとり經驗科學の方面においてのみならず、哲學の方面においても、殊に美學、倫理學、法理學、社會哲學などの如く文化現象又は社會現象に關する哲學的考察の方面においてもやはり重要な意義をもつ。けれど吾々はひとり實在的對象の考察についてばかりでなく、亦價值及び價值的對象の考察についても型の思想を役立て得るからである。¹⁶⁾だから、型的認識の本質を明かにする爲には、この方面における型的認識方法をも考慮することを要するわけである。¹⁷⁾

以上に述べたやうな考へからして私は型及び型による認識の論理的性質に關する考察を試みたと思ふのであるが、この重大にして複雑なる問題につき、主要なる論點の全部又は大部分を捉へて吟味するやうなことは、元より私の微力を以て企て能ふ所ではなく、この問題の解決の上に大體の見當を立てる事を期するに止まり、かつ吟味を加へむとする論點についても勿論十分なる

15) 從つて個々の精神科學の領域について型的認識方法の任務及び性質を考究する
16) 拙著「價值の文化現象」第三篇、價值の類型と個性参照
17) 拙著「社會學」の方面において型の問題が取扱はれてゐるときに、經驗科學の立場において論ぜられてゐる場合と、哲學の立場において論ぜられてゐる場合

闡明をあたへ得るとは考へない。私の考察の大體の方針は、種々の型の概念の各者につき代表的なる學説を取り來つて解明と批判とを加へた上、綜合的見地から種々の型の概念につき統一的理會を獲得する事に存する。但、この稿においては、斯かる方針にもとづく考察の緒論に當る部分を書きしるすことに止め、残りの部分は他の機會に發表したく考へる次第である。

三 型の概念の實用的意義

型 (*τύπος*, *type*, *le type*, *der Typus*) という語の從來普通に用ひられ來つた場合の語義から考へると、型は一定の平面的又は立體的形態をそなへ、それに相似た形態をそなへたものゝ創作される上に媒介として役立つ道具をいふ。¹⁾ 鑄型とか字型(活字)とかの如きはその代表的なるものである。なほ或る場合には、斯かる意味における型にそなはる形態その者が型とよばれることも稀れではない。斯かる意義において考へられた型といふ語によつて表明される場合の型の概念の意義を、その實用的意義とよぶこととする。

學問上、殊に精神科學において型の概念の用ひられる場合の意義と、斯かる型の概念の實用的意義とは互ひに沒交渉なものではないけれど、如何なる意味において二者は相關係するであらうか。私は型の概念の實用的意義を明かにすることは、その學問的意義を究める上に、差當つての

とがある。かつ實際にはこの二つの立場が併存してゐることもある。

- 1) 西洋においては平面的形態を抑捺し印象するための道具又は斯かる道具のそなへる所の一定の形態をさすのが、*type* の概念の普通の意味たるやうに思はれる。

索縁をあたへるし、或る程度においてこれに裨益するものであると考へる。それ故、型の概念の論理的性質を考察するに先立ち、その實用的意義を考察して置きたいと思ふ。

今、かりに鑄型の例について見るに、鑄型は常にそれによつて造り出される鑄物を連想せしめるものであり、鑄物との間の斯かる關係においてのみ鑄型としての存在を有する。鑄物も亦必ず斯かる關係に想到せしめるものであり、鑄型を豫想するのでなければ鑄物を考へることは出来ない。時間的に鑄型は鑄物に先在し、前者の有する一定の直觀的立體的形態は、後者の有する其れの成立の條件を成す。後者の形態は前者の形態に著しく類似し、實際上の目的からしては相等しきものとして視られ得る。言ひかへると、鑄型と鑄物とにおいて反覆的に殆んど同様な形態が見出される。斯かる一定の形態の近似的再現又は反覆は、何らかの生活上の見地から要求される所である。それは鑄物のそなへる直觀的形態が或る種の美的價值を有する爲である場合もあり、斯かる美的價值を有することが裝飾、記念、日常生活、營利等の目的に役立つ爲である場合もあるし、美的價值をはなれて全く他の用途の爲に一定の形態の再現の要求される場合もある。勿論、鑄物は一定の形態のみならず何等かの物質的性状をそなへる事も要求されるが、この要求は鑄物の特殊の用途の上から定まらばかりでなく、鑄物が一定の形態を保持し得る爲にはこれに適した一定の物質的性状をもつことが必要とされるのである。これと照應して鑄型その者も一定の

物質的性狀をもつことを要し、例へば青銅の鑄物の製作の爲の鑄型は恰も青銅によつて一定の形態が再現される爲に適當な物質によつて形成されて居なければならぬ。

鑄物における一定の形態の反覆につき要求される所の嚴密さは個々の場合の關心の種別によつて程度を異にするが、鑄型の形態と鑄物のそれとの相等性又は相似性に基いて、鑄物相互の間にも形態の相等性又は相似性の成り立つことが要求される。斯かる二様の關係における形態の反覆の目的の爲に鑄型が用ひられるのは、何らかの技術上の理由に因する。例へば、青銅器の鑄型について言へば、吾々は型によらずして直ちに青銅を一定の仕方で形態づけることを得ない。とにかく型に依ること、すなはち一定の形態を有する物の產出の上に専ら人間の意志の統制による手の働きに俟つのでなく、機械化されたる過程を採用することが望ましいと考へられる故に、型が用ひられる次第である。而して型その者は更に型を媒介として機械的工程を経て產出される場合もあるであらうが、終局においては人間の直接の手の働きによつて製作された原型があたへられなければならぬ。

以上の所説においては普通の用語法に従つて鑄造の工程に役立てられる物又は道具を鑄型とよんだが、斯かる意味における鑄型の具有する所の形象又は形態を型とよぶ事とするならば、その具有者たる物又は道具は別の語によつて呼ぶことを可とすべく、以下においては之を示型者と

よぶ事とする。そして示型者を媒介として制作される所の物を斯かる關係において従型者と名づけたい。

鑄型による鑄物の製作の場合をとほして考へた所の型の機能に關し、これを使用する人間の意識の方面において如何なる條件のみたされることが必要であるかを示せば——(1)一定の直觀的形態を有する物の表象、(2)斯かる形態を有する物の成立を要求する意志、(3)同様の形態を有する物即ち示型者を媒介とする事により斯かる企圖を實現せむとする意志、(4)斯かる型を制作する意志及びその實行、(5)制作された示型者の目的適合性の認識、(6)材料上及び工程上の諸條件をみたすことにより従型者を造り出す意志及びその實行、(7)この制作過程の結果の成功の認識等を擧げることが出来る。これらの條件の中で、型の論理的機能の考察の見地からして注目されるのは、示型者の具有する一定の直觀的形態の知覺、従型者にあたへられた一定の直觀的形態の知覺、示型者と従型者との間における形態的相等性(又は相似性)の認識、及び全過程を統制する目的意識である。

以上の客觀的及び主觀的諸條件について更に反省して見ると、(A)型すなはち規準たる一定の形態を有する所の示型者の存在及び其知覺的認識が第一に要求される(形態性及び形態特定性の條件)、次に(B)類似的又は相等的形態の產出及びその認識(等形性又は類形性の條件)、その他、(C)

示型者と従型者とが異なる物であり、前者が時間的に先在し、後者の成立の條件を成すこと（示型者の超越性及び形態規定性の條件）。(D)これらの事柄が生活上の目的に叶ふと考へられること（型の規範性及び合目的性の條件）に注目することを要する。かやうな條件を併せて考へると、示型者及び従型者の有する屬性の一つとしての直觀的形態の見點が型の實用的意義の理會の上に甚だ重要なことが知られる。示型者と従型者との相關的關係は型すなはち一定の形態を中心として成り立つ。従つて示型者の有する形態を明かにすれば、それを媒介として成立する所のすべての従型者の形態についての理會を獲得することが可能である。生活上の實際的目的から見れば、型において觀取される一定の形態的構造はすべての従型者の有する形態との比較において最も合目的性に富むのである。或る示型者の形態を明かに認識することは、それによつて製作された従型者を他の種類の有形者から識別することに役立つ。示型者と従型者とは等形性（又は類形性）によつて靜態的に關聯するのみならず、産出の過程をとほして動態的、機能的にも關聯する。そしてこの産出の過程その者が一定の形態を中心として等形的構造において成り立つ。型としての形態は鑄型等の場合においては直觀的形態であり、従つて一定の形態の要求される具體的目的の何たるかを問はず、常に形式感情を惹起するに適した性狀をそなへ、美的價值判斷の對象たり得る可能性をもつ。

型の機械的作用は元來は人間の欲求と工夫と努力とに基くものであるけれど、従型者の産出の上における人間の意識の働き及び身體の働きを省き、産出過程を機械化してゐることに注意せねばならぬ。けれどこれに因り示型者が従型者の成立を制約する關係が自然の世界における種々の有形態物の産出過程に何程か接近せむとするからである。しかもそれにも拘らず、他方においては依然として制作者の意志が従型者の制作工程を統制することが必要であり、この方面から見れば、文化の世界において種々の有形態者——例へば經濟財とか藝術品とかの如き有體者のみならず、例へば組織、制度といふ如き無體者をも併せて——が目的々に形成される過程に相似た點がある。

鑄型や字型や版型などにおいては型の機能は機械化されてゐるが、有體物の制作の爲にする型の中でも、その機能が機械化されて居らず、單に制作者の爲に一定の直觀的形態を提示する機能を有するに止まり、従型者の産出は人間の意識及び身體の直接の働きによつて行はれるものも數多くある。彫刻、書畫、織物、器物、建築物、庭園等の人工物が原型とされ、これによつて模造の行はれる場合、人間その他の動物の身體、自然の景觀、個々の自然物等の動的又は靜的形態が原型とされ、模寫又は模造に役立てられる場合などにおいてその例を見る。これらの場合には、一定の形態が機械的に再現されるのでないから、従型者において原形態が擴大、縮小、變形等の

種々の修正的取扱ひを受ける場合が多い。かくて示型者の保有する型に對する従型者の倚存關係は、或は多面的であり或は一面的であり、或は高度であり或は低度である。而して示型者の型を保有する基盤的關係が謂はば抽象的となり、自由性を増したものであるとして、器物、建築物、庭園、都市等の制作の設計圖案を擧げることが出来る。此場合には、一定の立體的形態を有する従型者の産出のために一定の平面的形態が型として定立される。かやうに型が觀念化され、自由性を加へられる方向が一層進められるときは、何等の物質的基盤をも有せぬところの制作者の意識における一定の形態表象その者が型として（嚴密には示型者として）の機能をいとなむ事となる。この形態表象その者は、他の物質的基盤を有する形態の知覺によつて獲得されることもあるし、制作者の想像作用によつて形成されることもあるであらう。かやうに型が單に心理的基盤の上に存立するものにあつては、型の實用的機能は漸次に型の論理的機能に類似した様相を示すのであるが、翻つて考へれば、型の實用的機能が機械化されてゐる場合と然らざる場合とを問はず、また型が物質的基盤と結合せるか心理的基盤と結合せるかを問はず、常に型の使用者の意識における型の表象が、型その者の示す客觀的形態と相並んであたへられるのでなければ、型を中心として示型者と従型者との間に靜態的及び動態的關係が成り立ち得ない。そして制作者が型の表象をどはして型と従型者の形態との間における等形性又は類形性の成立を判斷する作用は、實際生活に

内住する認識作用に他ならず、或る程度の認識價值をもつものである。

型の思想が經驗科學特に文化科學又は社會科學の領域における認識に役立てられるに至つたのも、型の實用的機能に内含される型の表象の認識的意義によつて暗示されたものと見得るであらう。以上の例においては、視覺的官能を媒介として知覺される所の形態たる型の例について考察したが、その他の種類の形態、殊に聽覺的及び觸覺的形態についても示型者と従型者との關係の成立せる例を實際生活においてたやすく求め得るし、味覺、嗅覺などについても幾らかその例を見出し得る。そして形態の單純なるものから複雑なるものへと種々の階段が觀取され得るし、ひとり靜的形態のみならず動的形態についても型と従型者との關係の成立せるのを觀取し得る。

なほ以上に試みた所の實用上における型の構造の考察について見れば、類型、典型、理念型、定型、純型等の種々の型的概念が學問上に定立されるに至る契機ともいふ可きものが、型の實用的機能の中に内含されてゐることを知り得る。そして學問上に用ひられてゐる斯やうな種々の型的概念の性質を明かにし、これを統一的見地から理解し整序する上に、型の實用的機能に關する理解が何程か役立つであらうことが推測されるのである。